



灯台もと暗し。

最近頻繁にこの言葉が思い出されなければならない。あまり良い意味では使われない言葉なので、私もできることなら思い出したくないのだが、つい頭に浮かんでしまふのだ。

私が灯台と重ね合わせてしまうもの、それは広島大学である。国際化時代を迎え、広島大学も時代の流れに沿って改革を進めてきた。積極的に留学生を受け入れたり、新しく国際協力研究科を設置するなど、その試みは高く評価できる。国際化とは、異文化を知り、多様性を認め合うことである。

しかしこのことは、国際舞台のみならず、国内のしかも一つの大学内にもあてはまる。大学が真に国際化を成功させるためには、まず学内の多様性を認め、次に海外との相互理解を図ることが大切である。

だが現状を考えると、残念ながら広島大学は後者の方に力点が置かれているように思われてならない。もし学内の、つまり学生の多様性が尊重されているのなら、夜間部学生の今おかれている環境は、もっと改善されてよいからである。

思い返せば四年前、期待に胸膨らませて広島へやって来た私は、確かに広島大学に入学したはずであった。しかし広大移転事業が本格化するにつれて、私の広大に対する帰属意識は揺らいできた。東広島キャンパスは年々立派になるが、それに反比例するかのようになり、東千田キャンパスはさびれる一方である。

我々夜間部学生も正式な広大生であるのに、広大生として当然期待できる教育、設備等を満足に与えられていない。我々は本当に広大生なのか、広大はきちんと我々を考慮しているのだろうか、このように疑いたくなる理由はいくつも挙げられる。

まず、夜間部学生の講義について問題がある。第二部から夜間主コースに変更され一般教養の授業科目は増えたが、専門科目の授業は依然として極端に少なく、聴講する科目を自分で決めるというよりはむしろ既に決まっているも同然で、ほとんど選択の余地がない。毎日、講義は夜の数時間だけ開講されるので、時間割が制限されるのは仕方がない。しかし、専門科目が一目しか開講されず、研究指導も行われない曜日があるというのはいかにもおかしい。もう少し我々に学ぶチャンスを与えて欲しい。

夜間部学生のつづき

文・経済学部第二部 鈴木 平
(Suzuki, Taira)

また、東千田キャンパスの設備にも不満を感じる。夏は気分が悪くなるほど暑く、冬はかじかむほど寒い。夜間に学ぶ学生にとって最も重要な照明も十分とは言えない。トイレすら各階がきちんと使えない状態である。もうすぐ取り壊される校舎に設備投資をするのは、もったいないことなのかもしれない。でも、勉学は環境が整ってこそさらに進歩するものだ。大学に来て、せめて心地よく学業に打ち込むことができるよう、構内設備の改善を望む。

しかし、我々を取り巻く環境がすべて悲惨な状態であるわけではない。旧校舎が取り壊されるのと同時に、新校舎の建設も始まった。また、図書館東千田分室は以前より蔵書が増え、広くなり利用しやすくなった。生協は、営業時間が大幅に短縮されたことは理解しがたいが、店舗はきれいになったのが気持ちがいい。

また今春より、東広島キャンパスと東千田キャンパスとの間の双方向授業がスタートした。通学に不都合の多い夜間部学生にとって画期的な試みである。

しかしこの講義は、夜間主コースや法学部生には有益であるが、それ以外の学生、特に経済学部生は単位取得できないなどの問題がある。この点に関しては、諸先生方より詳細な説明をいただいた。我々は、第二部から夜間主コースへの過渡期に在籍している学生である。そのために生じている矛盾のひとつであるらしい。不公平さを感じつつ、妥協しなければならぬ問題である。

少しずつ改善が進められている。でもこれら我々が喜ばしく感じていることは、大学に所属している学生ならば本来受けられるサービスである。東広島キャンパスの学生と比べると、我々の大学での生活はいまだもってお粗末であり、疎外感を感じざるを得ない。

ところで、現在広島大学に関係している方々の中で、夜間部学生を覚えており、仲間であると認めてくれる方は、どのくらいいるのだろうか。

移転事業の完了により東千田キャンパスの思い出が薄れていく中で、我々の存在すらも忘れ去られていくのではないだろうか。我々が一番望むことは、夜間部学生も広島大学の一員であることとを皆が忘れないで欲しいということである。

我々は昼間部学生と同じ講義を学んでいる。さらに、多くの学生は、日中は社会人並に定職に就き働いている。昼間部で学ぶ学生を評価すると同時に、夜間部で学ぶ学生も評価して欲しい。

大学は学生にとって灯台のようなものである。学生に学ぶ喜びと人生を切り開く指針を与えてくれる。広島大学は東千田キャンパスからスタートし、大きく飛躍したのだ。国際化を目指し、遠くまで光を投げかけることは素晴らしい。願わくばそれと同時に、灯台の足元も、もう少し照らしてもらいたいのである。

